



原 田 市太郎 博士
(1916~1994)
1990年12月3日
於 東京都立大学

初代会長原田市太郎博士を偲んで

本会名誉会長原田市太郎博士は去る10月15日肺炎のため東京の病院で逝去されました。享年77才。申すまでもなく本会の生みの親であり、初代会長として会の設立と発展に心血を注がれ、今日の基礎をつくられた大恩人であり、本会にとってかけがえのない大切な方でした。訃報が伝えられた16日の朝は、早速大滝前会長よりの悲痛な電話があり、今日まで共に携えて来られた先達を失われた悲しみがひしひしと感ぜられました。私個人についてもまた、東大の植物学教室で共に学生生活を送った古い友人の一人としてこの上もないショックを受け、耐え難い気持を覚えます。在りし日の面影を偲びつつ、心から哀悼の意を表するものです。

原田さんの告別式は本郷追分の願行寺で行われました。ここは原田さんが昔住んでおられた場所であり、御住職も昔からのお知り合いということでした。原田さんはこの東大農学部^の隣接地というめぐまれた環境に育ち、天賦のすぐれた才能はここでいよいよ磨きをかけられ、やがては赤門内の理学部2号館の植物学教室の一員となり、

昭和13年から25年まで13年間の東大での生活が続きました。

これより先、中学・高校時代は目黒区の府立高校で過ごされました。府立高校といえば当時東京で官立の東京高校と並ぶ7年制の公立高校で、中学一高校を1年短縮で完了する所謂秀才コースであり、小学校のトップレベルの生徒が目指した難関でした。告別式の後、神田の学士会館で「故人を偲ぶ会」が催されこれに出席しましたが、ここに府立高校時代の友人である木原太郎氏(東大名誉教授・物理学)が出席しておられ思い出を語られました。当時の旧制高校は文科と理科に分かれており、理科で第一外国語をドイツ語とする級があり、理科乙類(理乙)とよびました。原田さんも木原氏もこの理乙のクラスでした。このクラス内でドイツ語がとび抜け秀れていたものが3名あり、その3名に原田さんも木原氏も入っていた由で、このことから2人は気の合った友人であったといえます。また告別式の弔辞の中で古沢潔夫氏は原田さんのドイツ語の秀れていた事について述べ、大学生

の頃のレポートで参考論文にドイツ語の論文を自由に駆使していたというすばらしさを讀えていましたが、このようなことから原田さんの実力は推して知るべしといえましょう。水草研究会の集会の講演の折などに、原田さんはドイツ語の片鱗を示された事がしばしばありましたが、木原氏や古沢氏の話より学生時代からのすばらしさを伺い、今にして納得できた気がします。

ドイツ語と関連して次の様な話も伺って感銘しました。原田さんの御臨終が近づいた折の事ですが、原田さんは枕元に置いてあったドイツ語訳のついた仏典(正信偈)を胸にし静かに最後まで口ずさんでいられたということです。奥様からこの話を伺った時は、敬虔にして崇高な原田さんの最後の姿を偲んで思わず涙目し合掌しました。原田さんは本当に日常われわれが想像できない程の高いものを秘めたすばらしい方だったとつくづく思います。

原田さんは戦時中東大にあり助手として研究室を守られました。終戦後の昭和25年5月からは東大時代の先輩で名古屋大学の助教授をされていた小野記彦氏が都立大学に移られた後、名古屋の助教授として迎えられ、昭和39年までの若さに溢れた時代を研究と指導に当てられました。因に都立大学に移られた小野記彦氏は私の所属している講座の教授となられたのです。寄しき因縁といえましょう。そして、その小野教授夫妻が後に原田さん御夫妻の媒酌人をされることとなります。更に都立大学は前述の府立高校が新制大学となったものであり、私は原田さんの学んだ校舎敷地で40年間も過ごした事となります。誠に因縁の深い関係を痛感します。

昭和39年に原田さんは、松浦教授定年後の北海道大学理学部に教授として移られ、伝統の北大で研究と指導に情熱を傾けられ活躍をされました。更に昭和55年からは南の沖縄に飛び、南国の島琉球大学で大学院設置に関与して大いに貢献されました。また昭和57年の定年後は雑誌キトロギアの編集に当たられ、週に何回か本郷に通われていました。

前述の学士会館での「偲ぶ会」では、それぞれの時代、それぞれの場所で関係をもった方々から、原田さんの在りし日のことが語られ、誠に充実した集まりでした。一方お酒の話もいろいろ語られました。私は原田さんのお酒は楽しいお酒であったと思っています。もう一度楽しく盃をくみ交わすことも、適わぬこととなってしまいました。

ところで原田さんの水草研究への発足は東大で篠遠喜



昭和59年8月 信州戸隠にて夫人とともに

人先生の下で細胞遺伝学の研究に取り組み始めた時から始まったようです。原田さんは材料として沼生群(イバラモ目)を選び、水辺や海岸への採集に精進されていた様です。この頃の染色体研究の成果は1942年頃から遺伝学雑誌や植物学雑誌、更にはキトロギアなどに次々と発表されています。原田さんの水草に対する興味と愛着は当然この時代に始まっていたと思われませんが、その後世の安定と共に関心をもつ同好者の結集を呼びかけ、遂に昭和54年には大滝末男氏等の同志と共に、水草同好会の発足にこぎつけ、さらに水草研究会へ発展をみるに至ったのです。しかし上述のように昭和55年から琉球大学教授として沖縄に向うことになったため、同好会設立時以来の協力者であった大滝末男氏に2代目会長を託し、自らは会長から下りられました。その後も常に毎回のように夏の全国集会には顔を見せられ、講演もされ、会の発展のために変わらぬ関心を示されていました。戸隠高原の林中(S59)や裏磐梯の五色沼(S61)などでの白い帽子の原田さんのにこやかな笑顔が目につくようです。水草研究会発足の頃より入会のすすめをうけていながら、私は水草の定義が高等植物を対象としているのではないかと疑問から躊躇していましたが、第5回の全国集会に参加し、その雰囲気よきに心を惹かれて、その後毎回参加するようになりました。

原田さんは水草の会をこよなく愛しその発展を願いつづけた方でしたが、この原田さんの期待はかなりの面まで実現しつつあるように思えます。会員数は増加しましたし、会誌の内容も充実しつつあるし、会の形態もととのってきました。これらは勿論事務局長始め幹事の皆さんの献身的なご努力によるものと感謝せざるを得ない所

です。原田さんは10周年の折、記念誌の巻頭で、「水草を楽しむ」という気風を大切にしたいものと述べられています。そしてまた「初心忘るべからず、そして展新を」と望んでおられます。会誌の内容が学会誌的な本格的な内容に傾くことは自然なことであり、望ましい方向ともいえますが、しかしその基本に水草に対する愛情をもち、水草を楽しむ姿勢を失わないでほしいという気持ちは私も原田さんと全く同意見といえます。水草研に私が惹かれるものの中には、この様なものがあつたからではないかと思う次第です。水草研を心から愛し、その育成に心血を注がれてきた原田さんは、会誌に「水草研究会の歌」まで発表されています。また特にお酒をたしなまれた原田さんは、「水草とおサケ」の随筆も寄せられています。一見学会誌にはなじまないこの様な試みを意識して出されるのかどうかは判りませんが、高度なものを目指した論文や、ひた向きの研究成果の並ぶ中に、この様な楽しい遊びの同居する会誌には何かそよ風の吹き込むようなものを感じ、寧ろほほえましい気持ちです。水草等に関し会員が自由に何でも発表できる場が残されてほしいと望むものです。

私の敬愛する古い友であり、畏友ともいえる原田さんを偲び筆を進めて参りましたが、もう2度と会えないと思うと哀惜の念に耐えません。生前賜ったご友情とご厚誼を深謝し、謹んで心からご冥福をお祈りいたします。また原田さんが水草へそがれた尊いお気持ちを付度し、今後共懸命に水草研究会を守り続けたいと願うものです。

水草研究会会長 加 崎 英 男



名古屋大学時代(昭和31年ごろ)

《原田市太郎先生略歴》

- | | |
|-------------|----------------------|
| 大正5年(1916) | 北越蒲原平野の小さな町に生る |
| 〃 8年(1919) | 一家あげて東都へ移る |
| 昭和4年(1929) | 七年制府立高等学校尋常科(旧制中学)入学 |
| 〃 8年(1933) | 同上高等科(旧制高校)理科乙類進学 |
| 〃 13年(1938) | 東京帝国大学理学部植物学科入学 |
| 〃 16年(1941) | 3月 同上卒業、つづいて旧制大学院入学 |
| 〃 17年(1942) | 東京帝国大学理学部助手 |
| 〃 23年(1948) | 東京大学理学部助手 |
| 〃 25年(1950) | 名古屋大学理学部助教授 |
| 〃 39年(1964) | 北海道大学理学部教授 |
| 〃 55年(1980) | 琉球大学理学部教授 |
| 〃 57年(1982) | 同上退官 |
| 平成6年(1994) | 没 |

(北大最終講義資料の「略自歴」に加筆)